敦煌本『禅源諸詮集都序』の残巻について

田中良昭

一

台湾国立中央図書館所蔵の敦煌巻子については、昭和四四年（一九六九）春、台湾の仏教事情を調査された牧田諦亮氏が、同年六月大正大学での第二〇回印仏学会で、現地調査の結果を「台湾の中央図書館所蔵の敦煌写経録」と題して報告し、更に『印仏研』一八巻二号に「台北中央図書館の敦煌経」と題して発表された。報告の際に配布された『台湾国立中央図書館敦煌写経類目録』（以下『牧田目録』）には、一四五種の経題、巻数、紙質、紙数が列記され、禅宗文献とみられるものとして、六四番に『大悲禅門偈』の名を挙げられた。

この牧田氏の論文によると、中央図書館所蔵の敦煌経については、まず『中央図書館甲庫善本書目録』に著録され、これが昭和三七年（一九六二）北京商務印書館で刊行された『敦煌遺書総目索引』に、「敦煌遺書散録」中の「前中央図書館蔵巻目」として転載されたが、それには六六種を掲げ、ついで昭和四三年（一九六八）香港の潘重規氏が、『新亜学報』八巻二期に、「国立中央図書館所蔵敦煌巻子題記」として、その後に増加したものを含めて全貌を紹介された。更に現在、台北中央図書館の敦煌経は、同館編印になる『国立中央図書館善本書目増訂本』（以下『増訂本』）の子部釈家類中に、

右釈家類三百八十三部一万二千四百三十巻三千六百十五冊別巻子一百六十一巻内不分巻者十部

と記すなかに混入されており、この巻子一六一巻のほとんどが敦煌経であるという。

ところで今問題の『禅源諸詮集都序』（以下『都序』）残巻についてであるが、『敦煌遺書総目索引』の六六種中、及び『牧田目録』の一四五種中には、その名の見出せないものである。ただ潘氏の論文が未見であるために、その中に著録されているかどうかは不明であるが、たまたま近年東洋文庫に収蔵された台湾国立中央図書館蔵敦煌文献の写真を調査した際、〇八九一五の番号を有する『大悲禅門偈』に続いて、〇

八九一六の番号を付した本書の存在することを知つた。そして以上の見地から、本書が『増訂本』の一六一種から『牧田目録』の一四五種を差引いた一六種中の一本ではないかと考えたが、その後、呉其昱氏のご厚意により昭和五〇年（一九七五）一二月香港の敦煌学会の編印になる『敦煌学』二輯をみる機会を得、そこに潘氏が「国立中央図書館所蔵敦煌巻子題記」と題して一四四種を挙げた内、その第一三三番に本書に関する記載のあることを知つた。因みに第一三二番には前述の『大悲禅門偈』が記載されている。

二

本書の形態及び内容の概略については、前述の潘氏の記述が参考になる。今それを示すと次の通りである。（『敦煌学』二輯五一頁）

【一三三】第二冊第六九八頁第八行
大乗禅門要略一巻（五代後周広順二年（九五二）写巻子本巻下）白紙、九紙、毎紙行数字数不等、凡存一百八十余行。紙幅参差不斉、首紙幅高約三十公分。起：「住法界、感而即通、名大覚尊。」訖：「禅源諸詮集都序巻下、後鈔圭峯大師所纂集著、訖「都総二百五十巻図面。」巻尾有題記云：「広順二年三月十日、従京来漢大師智清本上、抄写大乗禅門要録一巻。」此巻原作「大乗禅門要略一巻　不著撰人、五代後周広順二年釈智清　巻子本」、蓋誤。按題記意、智清非写経人、大乗禅門要録亦非此巻経名、蓋此巻末紙中有標題曰：「禅源諸詮集都序巻下」可証。
参大正蔵：第四十八巻諸宗部、二〇一五号、四一〇頁上二行～四一三頁上。

すなわち本書の形態については、白紙で九紙からなり、各紙の行数、字数は不同で、凡そ百八十余行あり、紙幅にも相違があつて、第一紙の縦は約三十公分だという。これは写真からも窺えることで、特に第二紙から第六紙にかけての五紙にわたる図式の部分は、各紙の大きさが極端に異なり、第三紙は縦横が逆に、また第七紙と第八紙は前後が逆に貼りつけられている。

次に内容についての潘氏の記述をみると、首部は「住法界、感而即通、名大覚。」で始まり、尾部は「禅源諸詮集都序巻下」とあつて、その後に圭峯大師の纂、集、著するものを鈔し、「都総二百五十巻図面」で訖つている。巻尾には題記があつて、これには「広順二年三月十日に、京より来れる漢大師の智清が、『大乗禅門要録』一巻を抄写した。」という。此の巻は、元来「大乗禅門要略一巻。撰人を著わさず、五代後周広順二年、釈智清の巻子本」とされていたが、これは恐らく誤りで、題記の意味を按ずれば、智清は写経人ではなく、「大乗禅門要録」というのも亦この巻子の経名ではない。恐らくこの巻子の末紙の中にある標題の「禅源諸詮集都序巻

下」がこれを証しうる。大正蔵経第四十八巻諸宗部、二〇一五号、四一〇頁上段二行～四一三頁上段を参照。というものである。

今この記述をもとに、本書の内容についてみると、本書は、鎌田茂雄氏訳注『禅源諸詮集都序』(『禅の語録』九)(以下『鎌田氏訳注本』)が全体を五八項目に分類する内、五二項中途より巻末五八項までに相当する。すなわち首部の「住法界、云々」というのがこの五二項に該当する。ただし写真第二葉と第六葉の二ヶ所に、五〇項の一部が挿入されている。従つて敦煌本『都序』とはいつても、それは末尾部分の残巻にすぎず、他本との文字の出入もかなり多い。

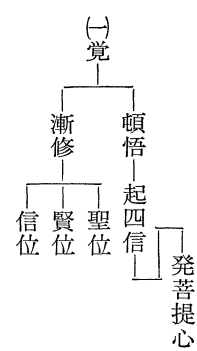
三

敦煌本都序残巻が、いかなる特色を有し、どの系統に属するものであるか、以下従来知られた『都序』のテキストと比較検討してみよう。

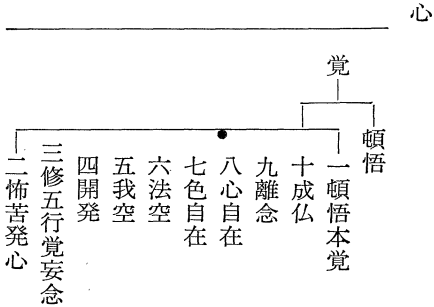
まず、従来のテキストとしては、宇井伯寿氏訳注本(『岩波文庫』昭和一四年)の底本とされた四巻の明蔵本と、その校合に用いた四巻の続蔵本、二巻の駒大蔵朝鮮本(一六三四)、元録本(一六九八)、田原本(年代不詳)の五本の内、四巻本から明蔵本(**明**)、二巻本から駒大蔵朝鮮本(**朝**)と田原本(**田**)の三本を、また鎌田氏訳注本(『禅の語録』九、昭和四六年)の底本とされた東洋文庫所蔵万暦四年(一五七六)二巻の宋版覆刻本、及びそれと同一系統の柳田聖山氏所蔵、弘治六年(一四九三)二巻の宋版覆刻本(『禅学叢書』之二、昭和四九年)の内、万暦四年宋版覆刻本(**宋**)との都合四本を選び出した。そして、この四本に新たに敦煌本(**敦**)を加えた五本について、敦煌本にある五二項から五八項の内、特に顕著な異同を検討してみた。その結果、次のような異同の存することが明らかになつた。

〔五四〕悟りと迷いの図式

(**敦・宋・朝・田**)



(**明**)



（宋・朝）

㈡仏―体大―法身
　　―相大―報身
　　―用大―応身

〔五七〕むすび㈠

（宋・朝）

㈢何必更読二蔵経及諸禅偈一。

（敦・田・明）

仏―体大―法身
　―相大―応身
　―用大―報身

（敦・田・明）

何必更集二禅詮一数過二百巻一。

（田は「百巻」の下に「耶」及び細字雙行にて「一百六十巻」の夾註あり）

〔五八〕むすび㈡

（朝・明）

㈣達摩

（敦・宋・田）

達磨

以上の対比からして、敦煌本は田原本と最も密接であることが窺われる。ただ五四項の「悟りと迷いの図式」における図の形式は、敦煌本は田原本よりもはるかに宋版覆刻本や駒大朝鮮本に近い。しかし、五四項の㈡の「仏」の三大、三身に関する解釈は、前掲の如く、敦煌本と宋版覆刻本、駒大朝鮮本とは、顕著に相違する。従つて、この点からすれば、田原本は図の形式についてのみは、独自の見地に立つてこれを整理縮少したと考えられる。

ところで、この田原本については、黒田亮氏の『朝鮮旧書考』によると、延文三年（一三五八）わが天竜寺の雲居庵にて、春屋妙葩が刊行した五山版の延文本によつたか、とされていることからすると、この妙葩刊行の五山版のオリジナルであつたものが、敦煌本ではなかつたか、と推定されるのである。しかも、鎌田氏の『宗密教学の思想史的研究』によると、この五山版の延文本は現存最古の刊本として、天海青山文庫―勝鹿文庫を経て、一八八四年以後大英博物館に収蔵され、カナダのマクマスター大学の冉雲華氏が、それに基いて英訳し、出版の予定であることを、冉氏の「禅源諸詮集都序最早印本的発現和証実」（『東方雑誌』復刊八巻二期）と題する論文によつて報じられている。

以上の推定が可能であるとすれば、現存最古の刊本である五山版延文本の出現と共に、更にそれをさかのぼること約四百年、圭峯宗密（七八〇―八四一）滅後百十一年の五代後周広順二年（九五二）に書写された現存最古の古写本が、末尾部分の断片ながら新たに出現したことは、注目すべきことである。尚、宗版後記には、裴休が唐の大中一一年（八五七）に自ら筆受し、延昌寺の老宿、唯勤禅師、契玄の手を経、契玄が顕徳元年（九五四）に呉越に入つて書写し流布させたとあ

るが、本書はそれより二年前の書写であり、宋版とは別系統のものであることは、前述した通りである。

四

先に述べた通り、本書の巻末には宗密の著作目録と題記がある。今それを示すと左の通りである。

圭峯大師所纂集著一経律論疏鈔集注解文義及図等件列三于左。
円覚大疏三巻　大鈔十三巻　科文一巻　円覚小疏二巻　小鈔六巻
科文一巻　円覚礼懺文四巻　明座禅修証儀式　円覚庶礼文十八巻
金剛経纂要疏一巻　鈔両巻　科文一巻　唯識頌疏両巻　鈔九巻
科文一巻　起信論疏両巻　鈔両巻　科文一巻　四分律蔵疏五巻
律鈔玄談両巻　科文一巻　普賢行願鈔両巻　科文一巻　花厳梵行
願疏一巻　鈔一巻　科文一巻　花厳経論貫五巻　梵網経綱要三巻
注発趣心戒一巻　注法界観文一巻　注弁宗論一巻　禅源諸詮都序
両巻　雑述瞻答法義集十二巻　道俗酬答文集十巻　集禅源諸論開
要一百三十巻　三教図一面　円覚了義経図一面　起信図一巻　累
代祖師血脈図　金剛経十八注図一面　都惣二百五十巻図面。
広順二年三月十日従京来漢大師智清本上抄写。
大乗禅門要録一巻

まず著作目録であるが、その最後に「都惣二百五十巻図面」とあることに注目したい。この巻数については、第八番目に『明座禅修証儀式』とあり、原写本は以下余白で改行し、第九番目の『円覚庶礼文十八巻』と記しているが、『明座禅修証儀式』は『円覚経道場修証儀十八巻』のことであり、『円覚庶礼文十八巻』は『円覚道場六時礼一巻』のこととみられるからして、恐らくこの筆写子が両者を混同したものとみられ、従つて、実際は『明座禅修証儀式』を十八巻、『円覚庶礼文』を一巻とみるべきであろう。また図面については、『三教図一面』以下五種を掲げているが、三番目の『起信図』のみは「一面」といわず「一巻」といつており、これを一巻と数えると、巻数の総計はまさに「二百五十巻」となり、先の記載と一致する。かくして宗密の著作は、四〇種二五〇巻図四面であつたとみられる。因みに、古田紹欽氏は「圭峯宗密の研究—法系・行状・著作・弟子等に就て—」(『支那仏教史学』二巻二号)と題する論文で三三種を、鎌田氏は『宗密教学の思想史的研究』で三七種を挙げておられる。また巻数の二五〇巻というのは、裴休の撰した『圭峯禅師碑銘』(以下『碑銘』)(八五五)及びそれを承けたとみられる志磐の『仏祖統紀』(一二六九)に、「凡九十余巻」というものよりも、はるかに多いことが知られる。

この著作名の中では、今問題の『都序』を『禅源諸詮都序両巻』といつて、先にみた如くこれが二巻本であることは、「禅源諸詮集都序巻下」の尾題と一致し、また『集禅源諸論開要一百三十巻』とは、『碑銘』と『宋高僧伝』に、『禅蔵』

というものを指すかともみられるが、『碑銘』ではその他の著作を含めて「凡九十余巻」というからして、『禅蔵』の巻数は九〇巻以下の筈であり、また『新唐書』芸文志と『禅籍志』目録には、『禅源諸詮集』を一百一巻としているが、これとても巻数に相違があつて、はたしてこの一百三十巻本が『禅源諸詮集』そのものを指すかどうか明確ではない。しかし鎌田氏によると、『禅蔵』の存在を肯定した学者に前述の冉氏があり、裴休の叙の巻頭には、「圭峯禅師集二禅源諸詮一為二禅蔵一而都二序之一。」といい、また朝鮮の『禅門宝蔵録』にも、「圭峯禅源諸詮集序及本録」ということからすれば、『禅源諸詮集』と『禅蔵』は同一のものと考えられ、それと敦煌本が「集禅源諸論開要一百三十巻」と記しているものとは、恐らく同一のものと考えられる。

次に「累代祖師血脈図」というのは、『中華伝心地禅門師資承襲図』（以下『承襲図』）を指すものとみられるが、従来の諸資料にその名を明記したものがなく、宇井氏も『第二禅宗史研究』では、『承襲図』の名は後人の不注意による命名で、元来の題名はなかつたのであろうと推定され、また鎌田氏は、『林間録』巻上に「圭峯答裴相国宗趣状」とか「草堂禅師牋要」の名で『承襲図』が引用され、「中華伝心地禅門師資承襲図」の名は、朝鮮においてつけられたのではないか、と推定されているが、既に古く中国でこのような名称で呼ばれていたことが、本書の出現によつて知られるようになつたのである。

最後に、尾部の「広順二年三月十日、京より来れる漢大師智清本上抄写す」という奥付と、「大乗禅門要録一巻」の尾題について注目したい。先に潘氏は、この智清が写経人ではなく、「大乗禅門要録」もこの巻子の経名ではない、従つて本書を智清の抄写した「大乗禅門要録一巻」とみるのは誤りであつて、「禅源諸詮集都序巻下」が正しいとされたが、確かにその内容は圭峯宗密の『禅源諸詮集都序』巻下そのものである。しかしこの巻末題記を卒直に読むならば、『都序』とそれに続く宗密の著作目録を含む全体が、「大乗禅門要録」の名で呼ばれ、後周太祖の広順二年（九五二）三月十日に、京より来れる漢大師智清が抄写したとみるのが妥当だと考えられる。潘氏は智清は写経人ではないといわれるが、今その人為についてはこれを徴する手だてを持たない。ただ京より来れる漢大師という以上恐らく本書は敦煌での書写になるものであろう。後周太祖の広順二年（九五二）といえば、禅宗燈史の代表作である『祖堂集』の成立と同年代であり、宗密滅後百十一年の書写ということからすれば、末尾断片とはいえ、現存最古の写本であることは間違いない。こうした古写本の出現、更には滅後百十一年当時に存在していた宗密の著作目録が新たに知られるようになつたことは、大きな意義と価値が存すると思うのである。